

上野東照宮：社殿（メインの建物）

上野東照宮のメインの建物（社殿）は、金箔、漆、そして多種多様な複雑な彫刻で凝った装飾が施されています。元の建物は、祖父であり神道の神となった大將軍、徳川家康（1543–

1616）の靈廟としては威厳に欠けると考えた將軍、徳川家光（1604–1651）の命によって、

この社殿は 1651 年に建立されました。家光は拝殿と本殿が一つの屋根の下にあり、狭い廊

下（石の間）で結ばれて、建物がアルファベットの H の形になる堂々たる権現造りで社殿を建て直させました。権現造りには高い建築技術が要求されますが、家光は費用を惜しみませんでした。そのことは建物の壁や扉がそっくり金箔で覆われていることから明らかです。

建物の外側はおもに動植物を表した多様で色鮮やかな彫刻で飾られています。その中には中国とインドの神話に登場する獅子と鳳凰（中国語ではフェンファン、日本語ではホーオー）といった生物や、昔から日本で縁起が良いと考えられてきた牡丹と松の木も含まれています。上野東照宮を、東京の北に位置する現在の栃木県に存在する、東照宮の本社であり徳川家康の埋葬地であるきらびやかな日光東照宮に近づけるために多大な努力と費用がかけられました。上野東照宮では、日光まで旅する余裕がない人が多かった江戸（現在の東京）の一般庶民に、しかるべき見事な場所で家康の魂に祈りを捧げるよう促すことができました。上野東照宮の社殿は日光の社殿よりもいくらか小規模ですが、その美しさと保存状態はお手本にした本社と肩を並べています。社殿は現在、重要文化財に指定されています。